

令和八年北斗句会自選三句（五十音順）

（令和七年九月～八年七月の間の三十三句から）

夏祭り

内山さちこ

焼芋の焦げ色眺めひとつ買ふ

夏祭り遠くに聞こゆ笛太鼓

大根を干して軒下懐かしき

老後

大崎石州

屠蘇を酌み老後明るく語り合ふ

ゆく吾の道草となる花野かな

若者の乱舞凄し佞武多かな

海開

太田黒幸川

浜辺から走りてダイブ海開

菖蒲園武士の素養の競ひ会ひ

義仲忌芭蕉は何故に寄り添ふか



冷やし酒

川崎きこう

風そつと肌撫でにけり秋の色

愛妻の花の下にて逝きし友

冷やし酒江戸切子にて喉の鳴る

明日檜

竹内雲泉

明日檜や八十余年の冬を耐へ

塩鮭をぶら提げ婿の訪ね来る

仏間にも陽の当たりたる冬至かな

明けの春

中村かよ

三百年の松の威風や明けの春

遊ぶ子の居ない路地裏昭和の日

紅さして母似の器量祭の子



ふる里

藤田紀潮

(令和八年四月三日逝去)

再生の北斗句会や菊香る

憂国に生きし漢や冬菫

波の穂にかくれ隠され浜千鳥

烈風や塑像のごとき寒立馬

ふる里や彼の川越せば菜の花野

(注記) 令和七年九月～八年四月までの八か月二十四句の

得点句から、五句を七月当番の雲泉が選びました。

話し込む

石田 きよし

捨て案山子つひにおみなの総理かな

ふらここや揺らさず話し込む二人

帰省して寺の大樹と話し込む

